

ハビトゥス・規則性・変化 ——ブルデュー社会学理論の可能性——

村田 賀依子

はじめに

ピエール・ブルデューの社会学は、主観主義と客観主義、意識と無意識、規則性と変化、集団と個人などの二項対立を乗り越えることを目指した。しかし、ブルデューがおこなった二項対立の乗り越えが成功しているか否かについては議論の余地がある。とりわけ、「ギデンズもブルデューも彼らの説明のなかでそれほどうまくは社会的（もしくは文化的）決定論を避けていないように、われわれには思える」（Harker et al. eds. 1990=1993: 279）と指摘されているように、ブルデューの社会学理論は再生産論、決定論であるという批判が強い。

ブルデューの社会学理論には、再生産論や決定論を乗り越えて変化を射程に入れる「可能性」が設定されている。しかし、その可能性は説得力のある形では十分に展開されていない。どうすれば、再生産と変化を両方説明できる理論としての可能性を引き出すことができるのだろうか。

本稿では、「主体なき構造主義か主体の哲学かというこの二者択一を抜け出すひとつの方法」（Bourdieu 1987=1991: 21）と位置づけられているハビトゥス概念について検討する作業を通じて、変化を論じることのできる理論としてのブルデュー社会学の可能性を引き出す道を探る。

ブルデューの理論全体と同様、ハビトゥス概念に対しても「ハビトゥスは……徹底的に既成の構造を再生産するという志向をもった心的装置である」（曾我 1994: 48）という批判がある。従来の多くの研究では、このハビトゥス概念の再生産的性格を乗り越えるために、ハビトゥス概念の不足点、ハビトゥス概念についてブルデューが十分議論を展開しなかった点を補う方向で検討がすすめられている。本論考では、先行研究において明らかになったブルデューの議論の不十分な点については踏まえつつも、先行研究とは異なる方向で検討をする必要があると主張する。ハビトゥス概念についての見方を変えることによって、ハビトゥス概念とブルデューの社会学理論の再生産的性格は解消されると論じる。

1 ハビトゥス概念の可能性と限界

1.1 ハビトゥスとは何か

まず、本論考の考察対象であるハビトゥス概念とはどのような概念なのか、説明してお

こう。

ブルデューは、ハビトゥス概念について次のように述べている。

ハビトゥスとは、持続性をもち移し替えが可能な心的諸傾向のシステムであり、構造化する構造 (structures structurantes) として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造 (structures structurées) である。
(Bourdieu 1980: 88=1988: 83)¹⁾

ハビトゥスは、実践を産出する原理として働く心的諸傾向のシステムである。ここで「実践」と訳しているのは、フランス語の *pratique*²⁾ である。実践 *pratique* には、「それほど意識的ではない、一定の反復的性格をもち、同形的にとられる行為」と「実際の、実地の行動」という2つの意味がある (宮島 1995: 7-9)。したがって実践とは、実地におこなわれるそれほど意識的ではない行為、という意味でとらえておくべきだろう。ハビトゥスは、このような実践的で日常的な行為の原理であるとされている。

「構造化された構造」であるハビトゥスは、「所与の構造 (たとえばある階級の生活諸条件) のなかで行なわれる社会化の所産であって、その構造への事実上の適合性という性格をもっている」 (宮島 1994: 277)。「構造化する構造」でもあるハビトゥスは「客観的に『調整を受け』 (*réglé*) 『規則的で』 (*régulier*) ありうる」 (Bourdieu 1980=1988: 84) 実践を産出するが、それは規則 (*règle*) への従属の産物ではない (Bourdieu 1980=1988: 84)。ハビトゥスによって実践にもたらされる規則性・一貫性はゆるやかなものであり、それはたとえるならば「次々と建増しされ、時の経過とともに累積されたあらゆるもの (部分的には不調和だが、基本的には調和的である) を持つ古い家」 (Bourdieu 1980=1988: 22) に見られる一貫性のようなものである。規則にしたがった実践に見られる「装飾家が一挙に外から押しつける美的センスに従って隅々まで整えられたアパルトマン」 (Bourdieu 1980=1988: 22) のような一貫性とは異なる。ハビトゥスは規則的な実践を機械的に産出するものではないという点が重要である。ハビトゥスによって産み出される実践には、ゆらぎや矛盾が含まれている。

ハビトゥスが産出する実践は完全な規則性には回収されない。このハビトゥスが規則性から外れる一面は、ハビトゥスが「絶えず変わっていく状況への即興的な対処」 (Bourdieu 1987=1991: 126) を産み出す「発明術 (*art d'inventer*)」 (Bourdieu 1980: 93=1988: 88) であるという部分にあらわれている。

このように、ハビトゥス概念のなかでは、社会構造に適合した規則的な実践を産出する側面と、即興的な実践を生み出す「発明術」という側面が同居している。規則性と規則性から外れる面を併せ持ったハビトゥス概念は

客観主義が社会的実践に認めながらも理由を説明できない連続性と規則性との本源

にあり、また機械論社会学主義による外からの、その場限りの決定論によっても、自発性を主張する主観主義による純粹に内部的な、しかし同じく点的な決定によっても説明できない、規則をもった変化の本源にあるのだ。(Bourdieu 1980: 91-2=1988: 86)

ブルデューは、ハビトゥス概念を、規則性と変化の両方を射程におさめる概念としている。

1.2 ハビトゥス概念の限界

ここまで、ブルデューがハビトゥス概念をどのように説明しているかを見てきた。ブルデューは、規則性と変化の二項対立を止揚する概念としてハビトゥス概念を考えているように見える。しかし、「はじめに」ですこし述べたように、ハビトゥス概念は変化よりも再生産に関わる概念として評価されている。

ロイック・ヴァカンは、読者を代弁して、ブルデューにあえて次のような質問をぶつけている。

多くの読者にとって、この概念〔＝ハビトゥス概念〕はなお決定論的に思えます。「予知できない、つねに変化する状況に対処することを可能にする戦略の形成原理」であるハビトゥスも、世界の客観的構造を身体化することによって生まれた以上、ハビトゥスが定める即興がそれ自体これらの構造によって「定められている」なら、革新的要素と行動の要素とはどこからやってくるのでしょうか。³⁾ (Bourdieu et Wacquant 1992=2007: 175, [] 内は引用者による)

このヴァカンの言葉からわかるように、ハビトゥスは構造を再生産するものであり、構造に決定された行為者像を示す、というのは一般的な理解と言えそうである。なぜそうなるのか。ハビトゥスには、自由な即興の形成原理、「発明術」という役割が与えられているが、結局のところ即興に許されているのは構造の再生産の枠内での自由にすぎない。したがって、宮島喬も指摘するように、ハビトゥス概念は「実践を媒介する原理としてある程度力動化してとらえることはできても、自律的な構造革新的要素としては位置づけがたい」(宮島 1994: 281)。このようなハビトゥス概念の再生産的性格がブルデューの理論全体に影を落とし、ブルデューの社会学全体を再生産論的にしていると言えよう。

ブルデューは、「循環的で機械論的モデルこそ、まさしくハビトゥスの概念が打破しようとするものです」(Bourdieu et Wacquant 1992=2007: 178)と言う。ブルデューが思い描いている「循環的で機械論的」ではないハビトゥス概念の像は、イメージや主張としては読み手に伝わっているだろう。しかし、説得力のある説明が十分になされているとは言えない。ブルデューがしたように「発明術」という側面をハビトゥス概念に加えただけでは、ハビトゥスと構造のあいだの循環的な関係は解けない。ハビトゥスの持っているはずの「循環

的で機械論的モデル」を打破する潜在能力を引き出すためには、ブルデューの説明の不十分な点を補わなければならない。どうすれば（どう改良すれば・どう解釈すれば）ハビトゥス概念は革新的な行為や構造変動を射程に入れることができるのか、考察する必要がある。

そこで次章からは、ハビトゥスと変化の関係を説明するにあたって、ブルデューの議論に何が不足しているのか、どこが不適切なのかを検討していこう。

2 ブルデューの議論に足りない点

この章では、まず、先行研究においてハビトゥスの再生産的性格を乗り越えるためにどのような議論がおこなわれているかを見ていく。先行研究ではブルデューの議論のどんな点が不十分だと指摘されているのだろうか。以下では注目すべき2つの指摘を取りあげる。ひとつめは、「状況の新奇性」がブルデューの議論では取りこぼされているという指摘（2.1節）、2つめは「反省的思考」がブルデューの議論のなかで適切な位置づけがされていないという指摘（2.2節）である。

次に、「状況の新奇性」と「反省的思考」のあいだにある関連について考察し、先行研究で示された論点をさらに発展させる作業をおこなう（2.3節）。最後に、先行研究において明らかになったブルデューの議論の不十分な点については踏まえつつも、先行研究とは異なる方向で検討をすすめる必要があると述べる（2.4節）。

2.1 状況の新奇性

ひとつめに紹介するのは、行為者が実践をおこなう状況の新奇性と、実践・ハビトゥスの関係を考えることが重要だという指摘である。

ブルデューは、「実践を説明できるのはただ、実践を産み出したハビトゥスが構成される場をなす社会的諸条件と、ハビトゥスが効力を発揮する場である社会的諸条件とを関連させる時だけだ」（Bourdieu 1980=1988: 89）と述べている。実践は過去の客観的構造を身体化したハビトゥスと現在の状況とのあいだの「弁証法的関係」によって説明されなければならない。この文章からは、実践をハビトゥスやハビトゥスが形成されたときの客観的構造に還元しない見方、客観的構造による決定論を避け、実践に変化の生じる余地を与えようとするブルデューの考え方がうかがえる（Harker et al. eds. 1990=1993: 137-8, 326; Schiltz 1982: 729; 倉島 2007: 41-3）。

しかし、ブルデューのハビトゥスについての議論には、実践の産出に寄与するはずの現在の状況の影響力を十分には論じていないという問題点がある。村井重樹は、ブルデューのハビトゥスは、現在の状況の期待や要求に一致していなくても（過去の状況に合った）実践を産み出す原理として作用し続けるのであり（たとえば「ヒステレシス効果」（Bourdieu

1980=1988: 100; 村井 2008: 43)), ブルデューの議論は現在の状況がもつ「新奇性」の意義を十分にとらえていないと指摘している(村井 2008: 44-5)。

ブルデューは、現在の状況の新奇性によってハビトゥス・実践がゆさぶられるという部分について理論化していないために、結局実践をハビトゥスに還元してしまう。そして、ハビトゥスと現在の状況の「弁証法的関係」に着目することによって開きかけた決定論から抜けだす道を閉ざしてしまうのである。

先行研究は、ブルデューの理論に欠けていた「状況の新奇性」とハビトゥスの関係について考察をすすめることによって、ハビトゥスのダイナミズムを明らかにし、ブルデューの理論を変化を扱える理論として発展させようとしている。村井はG・H・ミードの議論を参照し、状況の新奇性を、ハビトゥスを再編・形成する契機として考えるという視点を提起している(村井 2008)。

この節における議論から見えてきたことをまとめておこう。ブルデューのハビトゥス概念を循環モデルから解放する鍵は、実践がおこなわれる現在の状況の新奇性にある。ブルデューの議論は状況の新奇性とハビトゥスの関係を十分に論じていないために、決定論から逃れることができなくなっている。ハビトゥス概念の再生産的性格を乗り越えるためには、状況の新奇性がハビトゥスが実践を産出する過程においてどのような役割を果たすのか考察する必要があるということが明らかになった。

2.2 反省的思考

次に、2つめの問題点である、ブルデューの理論における「反省的思考」の位置づけについて考えよう。

ブルデューは、ハビトゥス概念を「実践の産出原理」と設定している。『ディスタンクシオン』にある「[(ハビトゥス)(資本)] + 場 = 実践」(Bourdieu 1979: 112=1990 I: 159) という記述から考えると、ブルデューはハビトゥス以外の産出原理を認めていないように見える。

しかし、実践に変化が要求される危機的な状況について論じるときに、ブルデューは合理的・意識的な計算が行為の産出原理になることもありえると述べている(Bourdieu 1990: 108)。より近年の著作でも、危機の時にはハビトゥスが「不調」になり、反省(「実践的反省(réflexion pratique)」)が実践を決定する要因として入り込むと論じている(Bourdieu 1997: 233-4=2009: 274-5)。

長年の考察を経て、ブルデューの考えに変更や修正があったのかもしれない。しかし、倉島哲も指摘するように、ブルデューは「実践における反省に一定の役割を認めているが、これを十分に説明することはなかった」(倉島 2007: 256)。ブルデューは実践的反省とは何であるのか、明確には説明していない。反省というアイディアは、ブルデューの議論のなかで積極的な位置が与えられないままになっている。

このブルデューの議論の問題点に対し、積極的な解答を与えようとした論者としてニッ

ク・クロスリーをあげることができる (Crossley 2001, 2002). クロスリーは、ハビトゥスが不調のときに反省が入り込むと考えるのではなく、つねに「我々の行為や世界内存在のあり方は、反省的であると同時に習慣的でもある」⁴⁾ (Crossley 2002: 349) と主張する。「もっとも合理的で計算高い行為者でさえ依然として、自分の意思決定のさいに、広範なハビトゥス、傾動、経験から得た方法などに依拠している……したがって、ハビトゥスによってある程度形づけられていないような決定などはない」 (Crossley 2002: 349) ⁵⁾. 危機の時には、一見、ハビトゥス的なありかたから反省的なありかたへ、実践の産出原理が移ったように見える (ブルデューが「ハビトゥスの不調」と述べたように). しかし、クロスリーは、「危機の時期に生じていることは、通常は反省されていない想定、感情、行動のうちのいくつかが反省的思考のなかにもたらされ、主題化されるということである」 (Crossley 2002: 349) と考える. 危機の時にはそれまで反省されていなかったことが反省の対象になるだけであり、実践の産出原理が入れ替わるわけではない.

そして、クロスリーは、反省的思考である「合理的計算や意識的計算それ自体が傾動や技能——そのようなものとして、これらはハビトゥスに属している——を獲得する」 (Crossley 2002: 349) と指摘する. 反省はハビトゥスによって支えられているのである (Crossley 2001: 113, 2002: 349). ハビトゥスと反省は代替的な関係にあるのではない. 反省はハビトゥスに支えられながらハビトゥスと共存する要素であると考えられている.

クロスリーのように反省とハビトゥスをはっきりと併置するためには、行為者とハビトゥスの関係についての考え方を明確にする必要がある. ブルデューの「[(ハビトゥス) (資本)] + 場 = 実践」 (Bourdieu 1979: 112=1990 I: 159) という公式のなかには、「ハビトゥスの形態以外に、行為者が入る余地はな」 (Crossley 2002: 330) く、このスタンスでは、実践を決定する要因としてハビトゥス以外の要素を積極的に位置づけるのは難しいからだ. クロスリーは、現象学などを参照し行為者概念 (あるいは agency 概念) を練り上げ、その練り上げられた行為者概念 (agency 概念) のなかにハビトゥスを位置づけなければならないと言う. このような考察をすすめることによって、クロスリーは、どのようにハビトゥスが生成され、修正されるのかが説明できるようになると考えている (Crossley 2001, 2002).

この節の議論を整理しておこう. 反省的思考とハビトゥスのあいだの関係を明確にすることによって、ブルデューの議論に見られる非一貫性は解消され、危機的な状況など変化の大きな状況でおこなわれる実践もハビトゥス概念の射程に入ることが明らかになった. また、反省についての検討は行為者概念の再考をうながし、ハビトゥスの発生メカニズムについての議論につながっていくという方向性が示された.

2.3 状況の新奇性と反省的思考の関係

先行研究は、ブルデューの理論には「状況の新奇性」と「反省的思考」についての議論が不足していると指摘していた. これらの論点はブルデューが必要性を感じていながらも十分に検討することができなかったところであり、ブルデューの理論を発展させるために

はこれらの論点についての考察を深める必要があるだろう。

この節では、先行研究において別々に取りあげられていた「状況の新奇性」と「反省的思考」の2つの要素のあいだには関連があるということを指摘したい。2つの要素を関連させてとらえることによって、ブルデューの議論を発展させるための視座をより練り上げることができるだろう。

2.2節で参照したクロスリーは、次のように述べている。「自我や世界の一定の諸相が我々にとっては主題的となり、同時に他の諸相が気づかれずに自明視されている」(Crossley 2002: 349)。行為者にとっての状況は、ハビトゥスによって自明視される部分と、反省的思考により主題化される部分（他の部分が自明視されることによって成立する）の2つによって成り立っていると考えられている。

このような状況についての考え方は、状況の新奇性についての理解を深めてくれる。ハビトゥスが自明視するのは、現在の状況のなかにある過去との類似性・連続性である。この自明視された部分が「地」となることで、過去とは異なる部分＝新奇性が「図」として浮かび上がる⁶⁾。ハビトゥスが過去とのちがいを浮き彫りにし、反省的思考がそのちがいを主題化することによって、状況は新奇性をもったものとして行為者の前にあらわれることができる。また、もちろん状況の新奇性は、行為者に反省を要求する。行為者が状況のなかの新奇性に出会い、新奇性に反応するためには、ハビトゥスと反省がともに必要だと言えることができる。

以上のように、状況の新奇性とは何か、反省的思考はどのように働くのかということは、ハビトゥスと状況、反省的思考の関係について検討することによって見えてくる。状況の新奇性と、実践はハビトゥス的であると同時に反省的であるという見方は、関連させながら考察しなければならない。このさらなる考察は、行為者の実践の変化に光をあて、ハビトゥスと構造のあいだの再生産的な関係を抜け出す道を示してくれるはずである。

2.4 ハビトゥス概念に対する新たな問い

先行研究は、ハビトゥスと状況、ハビトゥスと反省的思考の関係を明確にする必要があると指摘した上で、ハビトゥスが変化するダイナミズムやハビトゥス発生のメカニズムを明らかにする方向へ考察をすすめていた。村井はハビトゥスが再編・形成される契機として「状況の新奇性」を位置づけ（村井 2008）、クロスリーは行為者概念を練り上げ、ハビトゥスの発生メカニズムを明らかにしようとしている（Crossley 2001, 2002）⁷⁾。たしかに、ハビトゥスの発生・変化のメカニズムは不明瞭であり、このメカニズムについて考察することはブルデューの議論の内容を豊かにすることにつながる。しかし本稿の目的である、ハビトゥス概念の再生産的性格やブルデュー理論の決定論的性格を乗り越えるという目的に対しては、ハビトゥスの発生・変化のメカニズムについての考察はあまり有効性をもたないのではないだろうか。なぜなら、ハビトゥスの発生・変化のメカニズムが明らかになったとしても、《構造化された構造であるハビトゥスが実践を産出する》限り、ブルデュー

の議論が客観的構造による決定論であるという点はかわらないからである。ブルデューの理論枠組みを決定論から解放するためには、ハビトゥス概念についての基本的な見方、《構造化された構造であるハビトゥスが実践を産出する》という図式を問う必要がある。そこで次章では、本章での議論から明らかになった論点をベースに、ハビトゥス概念と実践の関係を問い直す作業をおこないたい。

3 ハビトゥスと規則性

この章では、2章で明らかになったブルデューの議論の問題点をふまえつつ、さらにブルデューの議論について批判的検討をすすめる。このさらなる検討の入り口は、1章で触れた「即興的な実践」である。

3.1 ハビトゥスと即興

1章において、ハビトゥスが規則性から外れる面は即興を産み出す「発明術」としてあらわされていると述べた。「発明術」であるハビトゥスは、多様な状況に合わせて即興的な実践を産出する。この即興的な実践は、「法的原則から演繹される行動の持つ見事な規則性を持たない」(Bourdieu 1987=1991: 126)。ハビトゥスが規則性から外れる実践を産出することは、ブルデューにとって重要なことであった。

しかし、1章でも述べたように、即興的な実践がハビトゥス＝構造化された構造から産出される限り、即興は構造の再生産の枠内でしか起こりえない。この限界はどのようにすれば越えられるのだろうか。

考えなければならないのは、ハビトゥス・即興的な実践と状況の新奇性とのかわりである。

2章で述べたように、実践はハビトゥスと状況のあいだの関係によって説明されなければならない。これは言いかえると、どのような状況に出会うかによって実践のありようが左右されるということである。実践は、ハビトゥスだけではなく状況によっても形作られる。とりわけ、即興的な実践については、それが状況によって導かれているという面を重視する必要がある。「絶えず変わっていく状況への対処」である即興は、変化する新しい状況に触発されなければ起こることがないからだ。状況の新奇性に導かれることによって即興的な実践が生じると考えなければならない。状況の新奇性なしでは、即興は生じないのである。

しかし、ブルデューの議論では、状況の新奇性をもつインパクトが十分にとりあげられていなかった。そのため、ブルデューは、状況の新奇性の関与があってはじめて可能になる部分（即興的な実践の産出）をハビトゥス単体の能力（ハビトゥス＝「発明術」）としてしまう。

2.3 節の議論をもとに、ハビトゥスと状況、反省的思考の關係に着目すると、我々は、即興的な実践とハビトゥスの關係を、ブルデューとは異なるかたちで考えることができる。行為者は、ハビトゥスと反省的思考のはたらきによって状況のなかにある新奇性に気づくことができる。その新奇性に対し反省的思考（実践的反省）でもって対処することが、即興的な実践につながる⁸⁾。このように考えると、「発明術」はハビトゥス概念のなかにあるのではなく、ハビトゥスと反省的思考と状況（の新奇性）という3つの要素が関連し合いながら実践が産出される過程のなかに存在するということになる。

ブルデューは、ハビトゥスを即興の産出原理とした。しかし、本節の議論から見えてきたのは、ハビトゥスは即興を生じさせるのに寄与はするが、単独で即興の産出を担うわけではないということである。ブルデューはハビトゥス概念に「変化の本源」を求めたが、そうでないと考えるべきではないか。即興の発明術、変化する実践の本源は、ハビトゥスと反省的思考と状況のあいだの關係にあるのではないか。

3.2 ハビトゥスがあらわすもの

ハビトゥスが即興的な実践の産出原理でないのならば、ハビトゥス概念とはいったい何をあらわしている概念だと考えればよいのだろうか。この問題を、ブルデューのハビトゥス概念の用い方から検討してみたい。

危機の状況あるいは激烈な変化の状況では、……一部の行為者たち、まさにゲームの以前の状態にもっともよく適応していた者たちは新しく確立した秩序に適合するのに苦労する。彼らの性向が機能不全になるのである。性向を持続させるためにおこなう努力が彼らをますます挫折に追い込むことになる。……

より一般的に言うと、ハビトゥスには不調がある。狼狽とずれの危機的瞬間がある。そのとき、即時・無媒介的適応の關係は中断される。そのためらいの瞬間に、反省の一形態が入り込む。……実践の方を向いている反省である。（Bourdieu 1997=2009: 273-5）

はじめの段落で説明されているのは、ハビトゥスの「ヒステレシス効果」だ。以前の状態によく適応していた行為者ほど、新しい状況に適合的な実践をおこなうことが難しくなる。このとき、ハビトゥスは、「過去の経験の能動的な現前を保証する」(Bourdieu 1980=1988: 86)もの、変化が起こる前の状態を再生産するような規則的な実践を産出するものとなっている。規則性から外れることをハビトゥスが妨げている。

次の段落では、より一般的な場合として、「ハビトゥスの不調」が語られる。多くの行為者は、それまでとは異なる実践を試みることで変化に対応しようとする。このときにおこなわれる規則性から外れる実践は、「ハビトゥスの不調」によって反省が入り込む隙ができたことで可能になるとブルデューは考えているようだ。この場合もやはりハビトゥス概念

は規則的な実践を産出するものと設定されている。規則性から外れた実践はハビトゥスが弱まることによって可能になるとされているからだ。

このようにブルデューは規則的な実践を産出するものとしてハビトゥス概念を使用している。これがハビトゥス概念の核心部分ではないだろうか。ブルデューは、ハビトゥスを「現に進行しつつあるものの中に存続する過去」(Bourdieu 1980=1988: 86)と表現していた。ハビトゥスとは、実践のオールラウンドな産出原理であるというよりは、実践の規則性の根拠となる、行為者が実践をおこなうときに無意識のうちに活用している過去であると考えられるべきではないだろうか。実践はいつも過去の経験の上になされる。したがって、実践はいつも過去から規則性・歴史性・持続性を受けついでいる。そのことを明確に示すことがハビトゥス概念の役割なのである。

3.3 ハビトゥスと変化

本章における考察から見えてきたのは、ハビトゥスは規則的な実践の産出を支えるものであり、即興的な実践の産出原理ではないということである。ブルデューは、ハビトゥス概念を即興の産出原理と設定することによって、即興をハビトゥスに還元してしまい、即興を構造の再生産の枠内でしか起こらないものにしてしまった。ブルデューは、ハビトゥス概念に即興的な実践の「発明術」という性格を背負わせることによって、思いとは逆に、ハビトゥスを革新的な行為を説明できない概念にしてしまったのだ。

ブルデューの記述からあえて距離をとり、ハビトゥス概念を実践の規則性を支えるものとして限定することによって、即興的な実践は、ハビトゥス（過去から受けついでいる規則性）と反省的思考、状況の3つの要素が関わり合うことによって生じると考えることができるようになる。このようにハビトゥスと他の要素との関係のなかで実践が生じるという視点をとることによって、関係のなかから生じる即興・実践は「構造化された構造」の規定を受けながらも「自由」であるものとしてあらわれる。

実践の産出過程についての《構造化された構造であるハビトゥスが実践を産出する》という図式に欠けていたのは、ハビトゥスと反省的思考・状況との関係が実践の産出に関わるという視点である。この視点を実践の産出過程に導入することによって、ハビトゥス概念は「変化を規定する規則性」として、変化が生じる過程のなかで積極的な役割を果たすことができるようになる。

一見、ハビトゥス概念を規則性に限定することは、ハビトゥス概念の説明力を縮小することにつながると思われるかもしれないが、そうではない。即興的な実践や変化をハビトゥスの内で処理せず、むしろそれらをハビトゥス概念の外、ハビトゥスと他の要素との関係に求めることによって、ハビトゥス概念は変化も含めすべての実践を支える概念として説得力のある形であらわれることができるのである。

4 ブルデュー社会学理論の可能性

本稿は、ハビトゥス概念の再生産的性格を乗り越える方法について検討する作業を通じて、ブルデューの社会学理論の再生産論・決定論的性格を解消する道を探ってきた。まず、先行研究を検討することによって見えてきたのは、ブルデューの議論では「状況の新奇性」と「反省的思考」への着目の必要性が示唆されているが、十分に考察されていないということだった。この点をふまえてさらに検討をすすめていくことによって、ブルデューの議論がはらむ別の問題が浮かび上がる。それは、ブルデューのハビトゥス概念が、本来はハビトゥス概念だけでは説明できない部分（即興的な実践の産出）を無理に自身の性質としてしまっているということである。本稿は、ブルデューのハビトゥス概念に生じているこの過負荷を取り除き、ハビトゥスを規則的な実践の産出を支えるものとして限定してとらえるべきだと主張した。ハビトゥスを規則性を産出するものとして限定し、ハビトゥスと反省的思考・状況との関係に視点を移すことによって、ハビトゥスと変化の結びつきは逆に明確になる。ハビトゥスは「変化を規定し支える規則性」として、実践に生じる変化を説明する際に積極的な役割を果たす概念となるのである。

ブルデューは、シェリーン・マハールによるインタビューのなかで、「私の考えは一般理論ではなく、ある手法です」（Harker et al. eds. 1990=1993: 50）と述べている。ハビトゥス概念にとって重要なのは、「ハビトゥスとは何であるのか」ではなく「ハビトゥスは実践に対しどんな見方・手法をとることを促すのか」であろう。ハビトゥス概念は、実践がおこなわれる過程において規則性・歴史性・持続性がどのように・どのような影響を与えているのかについて考察するよう我々を促す。ブルデューがハビトゥスの性質（何であるか）について述べたことからあえて距離をとり、ハビトゥスは実践のなかにある規則性に光をあてる概念だということに立ち返った本稿のアプローチは、ブルデューの理論の特質に沿った、ブルデューの理論の潜在能力をひきだすものであると考えることができるだろう。

ハビトゥス概念を実践の規則性を支える概念として限定すること、そして、ハビトゥスと反省的思考・状況との関係に着目することは、規則性と新奇性、自明視することと反省的に考えること、様々な要素間の関係のなかで実践をとらえるという視座に我々を導く。この視座に立つとき、ブルデューの社会学理論は、ハビトゥスと様々な要素が関わり合うなかでどのようにして変化が生じるのかを考察する理論としての可能性にひらかれることになる。

今後は、本稿で明らかになった視座からブルデューの社会学理論をとらえなおし変化を論じる理論として発展させる作業をさらにすすめていきたい。

[注]

- 1) 以下、原書におけるページ数と訳書におけるページ数を併記している引用箇所

において引用している訳文は、邦訳書を参照したが、訳語・訳文はかならずしも同じではない。

- 2) *pratique* は、「慣習行動」と訳されたり、「プラチック」「プラティック」と表記されたりすることもある。
- 3) この質問に対する解答のなかで、ブルデューは、ハビトゥスが変わりうるものであること、ハビトゥスと状況のかかわりを重視すべきだということを述べている (Bourdieu et Wacquant 1992=2007: 177-8)。しかし、これらの点について詳しく検討されているわけではない。
- 4) クロスリーは、現象学における習慣 (*habit*) 概念とブルデューのハビトゥス概念の類似性に着目し、現象学 (とりわけメルロ＝ポンティ) の習慣概念を理解することがハビトゥス概念のより深い理解につながると考えている (Crossley 2001, 2002)。
- 5) 『パスカルの省察』においてブルデューも似た議論を展開している (Bourdieu 1997: 233-4=2009: 275; 倉島 2007: 255-6)。
- 6) このとき浮かび上がる新奇性は、大きな変化である必要はなく、たとえば物の配置のちがいや (ブルデューが好むゲームの例で言えば) プレイヤーの動きのちょっとしたちがいでいかまわないだろう。また、クロスリーの議論のなかに、危機の時にはこれまで自明視されていたことが反省の対象となるという指摘があった (本稿 2.2 節を参照) が、そのことから考えると、「図」として浮かび上がる新奇性は、過去に存在しなかったものであるとは限らないと言える。新奇性とは何かという問題については、さらなる考察の必要がある。
- 7) ハビトゥスの変動について考察する必要性は、田辺繁治も指摘している (田辺 2010: 198-201)。
- 8) 即興的な実践に反省がともなうということは、ブルデューも認めている (Bourdieu 1997: 234=2009: 275)。

[文献]

- Bourdieu, Pierre, 1979, *La distinction: Critique sociale du jugement*, Paris: Éditions de Minuit. (= 1990, 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン——社会的判断力批判 I・II』藤原書店.)
- , 1980, *Le sens pratique*, Paris: Éditions de Minuit. (= 1988, 今村仁司・港道隆訳『実践感覚 1』みすず書房; 1990, 今村仁司・福井憲彦・塚原史・港道隆訳『実践感覚 2』みすず書房.)
- , 1987, *Choses dites*, Paris: Éditions de Minuit. (= 1991, 石崎晴己訳『構造と実践——ブルデュー自身によるブルデュー』藤原書店.)
- , 1990, *In Other Words: Essays Towards a Reflexive Sociology*, Stanford: Stanford University Press.

- , 1997, *Méditations pascaliennes*, Paris: Édition du Seuil. (=2009, 加藤晴久訳『パスカルの省察』藤原書店.)
- Bourdieu, Pierre et Loïc J. D. Wacquant, 1992, *Réponses: pour une anthropologie réflexive*, Paris: Édition du Seuil. (=2007, 水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待——ブルデュー、社会学を語る』藤原書店.)
- Crossley, Nick, 2001, "The Phenomenological Habitus and Its Construction", *Theory and Society*, 30: 81-120.
- , 2002, 西原和久訳「ハビトゥス・行為・変動——ブルデューの批判的検討」『現代社会理論研究』12: 329-57.
- Harker, Richard, Cheleen Mahar and Chris Wilkes eds., 1990, *An Introduction to the Work of Pierre Bourdieu: The Practice of Theory*, The Macmillan Press. (=1993, 滝本往人・柳和樹訳『ブルデュー入門——理論のプラチック』昭和堂.)
- 倉島哲, 2007, 『身体技法と社会学的認識』世界思想社.
- 宮島喬, 1994, 『文化的再生産の社会学——ブルデュー理論からの展開』藤原書店.
- , 1995, 「文化と実践の社会学へ」宮島喬編『文化の社会学——実践と再生産のメカニズム』有信堂高文社, 3-13.
- 村井重樹, 2008, 「『ハビトゥス』概念の行為論的射程——ミード理論からの示唆による『実践』の再把握に向けて」『ソシオロジ』52(3): 35-51.
- Schiltz, Marc, 1982, "Habitus and Peasantisation in Nigeria: a Yoruba Case Study", *Man*, 17(4): 728-46.
- 曾我静男, 1994, 「P. ブルデューのプラティックをめぐって(2)——〈表象=再現的思考〉の限界画定」『大同工業大学紀要』30: 39-54.
- 田辺繁治, 2010, 『「生」の人類学』岩波書店.

(むらた かよこ 奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程)

Habitus, Regularity and Change: The Potential of Bourdieu's Sociology

MURATA Kayoko

Abstract

Pierre Bourdieu aimed to escape from the opposition between objectivism and subjectivism. But Bourdieu's sociology is criticized as determinism. What is the cause of the misunderstanding about his theory? The purpose of this paper is to consider this question.

In this article, I will concentrate on a consideration of the concept of *habitus*, because Bourdieu uses this concept to escape from the opposition between objectivism and subjectivism. However, there are shortcomings in Bourdieu's formulation of *habitus*. Several studies have sought to identify the shortcomings. According to these studies, Bourdieu implies that 'the novelty of situations' and 'reflective thought' has important roles in the process of generation of practices, but he does not discuss their roles in detail.

The consideration of 'the novelty of situations' and 'reflective thought' will show other problem about *habitus*. Bourdieu argues that *habitus* is principles of the generation of improvisation. However, our consideration reveals that improvisation is generated from the relationship between *habitus*, reflective thought and situations. This discussion leads us to a view that *habitus* is not the capacity for generating improvisation and that *habitus* is simply the base of the regularity in practices. Such view does not devalue the concept of *habitus*. On the contrary, by restricting *habitus* to the base of the regularity, this concept is able to play an important role in an explanation of change. What seems to be lacking in Bourdieu's theory is an emphasis on the 'relationship' between *habitus* and other elements (the novelty of situations and reflective thought). From the point of view that the relationship between *habitus* and other elements generate practices, we are able to think that Bourdieu's sociological theory is a theory about change.

(Keywords: *habitus*, regularity, change, the novelty of situations, reflective thought)